

ホトトギス

昭和二十三年三月二十九日出版
昭和四年十二月一日発行
第一卷第二十五号

ホトトギス

十二月号



風雅の小筥（五十八）

廣太郎

阪神・淡路大震災の影響もあり、丸ビル建替えが決まり、ホトトギス社は平成八年五月一日から、同じ丸の内ではあるが、二丁目から一丁目の東銀ビルへと事務所が移転したのである。JR東京駅は南北にホームが伸びており、丸ビルに近い改札は丸の内南口という場所にあり、此処は嘗て大正十年十一月四日に、当時の首相原敬が暗殺された場所で、改札を出た直ぐの所に、襲われた場所にマークがあり、その近くの壁にはその時の詳しい経緯を書いたプレートが嵌め込まれている。私自身この事件は中学であつたか歴史の教科書で習った記憶があり、この場所に初めて立った時、何か歴史を強く実感したという記憶がある。

対して東銀ビルは、反対に丸の内北口という改札が最寄りで、例えば目黒区に住んでいる私の場合、山手線で丸ビルへの通勤は往路では一番後ろの車両が近いのに対して、東銀ビルでは一番前の車両が近い、という事になる。それでも思い出してみると、この時を境に乗る車両を替えたという記憶はあまり無いのである。

何れにせよこの平成八年から東銀ビルでの営業が始まったが、確かに丸ビルよりは近代的で、パソコン等のコード類は、丸ビル時代には床にそのまま剥き出しになっていたのが、カーペットの下を這うように配置され、それだけでもすつきりした印象になる。因みにこの「東銀ビル」という名称は、このビルの一階に東京銀行が入っていたという事からだそうだが、その時は既に三菱銀行の店舗であつた。

廣太郎句帳 廣太郎

令和三年十二月一日 NHK文化センター

雨音を踏めば大地の動き初む
黄落を踏み大地の目覚め初む
寒禽の声東雲を引き寄せて
冬霞高層ビルは宙に浮き

十二月二日 蕉心会

水尾曳いて水尾曳いて鴨陣を組む
庭園を統べ冬紅葉冬黄葉
瑕瑾無き空冬帝の玉座かな
冬ざるの土に命の鼓動かな
旗艦めく一羽の鴨に寄る数多
雪吊の縄の揺れ様にも流儀
静寂の鷺喧騒の鴨の陣
冬帝に纏はる髪切り過ぎて

十二月三日 六甲会

虚子の軸掛け冬座敷出来上る
北風や六甲の稜線尖らせて
北風荒ぶ富嶽は地震に明け初むる
冬座敷虚子の軸より暮れ初むる
父の座の遺されしまま冬座敷
寒灯に映ゆホトトギス創刊号
北風や鷗は宙に静止して

十二月四日 芦屋ホトトギス会

水の黙空の騒ぎに浮寝鳥
汀子邸枯芝にある矜持かな
短日の満席となる芦屋句座
冬芽抱く木々は未来を目指しつつ
マスクするより饒舌となる漢
心まで閉ざしてをりしマスクかな

十二月五日 野分会芦屋例会

その下の恋を見つめて冬木の芽

十二月五日 青嵐会芦屋例会

猪鍋や西京味噌を要とす
銀座には夜の蝶舞ひ枯柳
牡丹鍋兵庫に生れし矜持かな
十二月八日 悼 岡安仁義様

十二月九日 土筆会

北風に披講の声を攫はるる
寒禽の声蒼天を引き裂ける
ストープの温みを背に聴くボレロ
名戦のニュース冷たく聞く朝
開園のベンチ冷たく人拒み
冬の鳥水面褥に動かざる
靴音の冷たく響く
彩りの加減乗除や散紅葉
十二月十四日 朝日カルチャー若草句会

十二月十四日 北國文芸選者吟

虚子句集繙きてより日向ぼこ
太白に瞬き返して星凍つる
風邪恐れ人を畏れて籠りけり
オリオン星の凍星命終へんとす
凍星に闇饒舌となりゆけり
日向ぼこ夢に会ひたる君若し
十二月十四日 北國文芸選者吟

十二月十四日 北國文芸新年詠

紅葉散り敷いて錦絵めく大地
白銀を金に染め上げ初明り
十二月十六日 前議員句会
木洩日に枝振り揃へ冬木立
漣に對峙してある鴨の水尾
寒灯の燭一本といふ祈り
十二月十六日 登高会
夕焚火日暮誘うてをりにけり
霜柱踏めば昭和の音のして
霜柱魂を宿して立ち上る

霜柱地に還りゆく叫びとも
故郷の匂ひ立ちたる夕焚火
十二月十七日 廣邦会

明日といふ未来閉ぢ込め冬木の芽

十二月二十一日 目黒学園句会

雨音に師走のリズム聴く円居
古曆昨日てふ過去重ねつつ
街曆を弾き返して初水
思ひ出の重き加へて古曆
初氷張りて季節の扉開く
泉の鳴いて山気を整へる
日輪を遠ざけてある初水
十二月二十六日 青嵐会東京例会選者吟

十二月二十六日 野分会東京例会

魂の叫びを秘めて冬芽かな
冬座敷母は小さく生きてをり
冬の蠅玻璃のぬくもり纏ひつつ
日輪に命預けて 初水
冬木の芽樹齡千年てふ気品
その中に明日を閉ぢ込め冬木の芽
朽ちし葉を褥としたる冬芽かな
十二月二十八日 若水句会

一本の燭灯るより聖夜ミサ
笹鳴の一声に止む会話かな
白菜の色より暮れてゆく厨
街驛に祈り溶け込むクリスマス
笛鳴を心耳で聴いてある司教
白菜の薄口京のおぼんざい
十二月三十一日 「田鶴」新春詠

息遣ひ穏やかに来し去年今年
息荒く乗り込んで来し初電車
初鳴一息つける静寂かな
初鏡一寸息吹きかけてみる
寒声や息吸ひ込んである静寂

雑詠

廣太郎 選

闘病の始まる春となりけり 横浜 小川龍雄
 春寒の心の中を抜ける風 同
 春一番思ひもよらぬ所から 同
 額突けば英霊の声露涼し 福知山 吉田節子
 剥落の軍馬の碑文章草茂る 同
 若人の墓碑終戦日知らずして 同
 朝の家事金魚に餌をやりてより 横浜 高浜礼子
 水草を入れて金魚の嬉々と 同
 昼下り雨と金魚と私と 同
 夏休始まつてゐる朝の森 龍ヶ崎 今橋眞理子
 銀河濃し星屑こぼれ落ちさうに 同
 流星の余韻に雲のかかりくる 同
 一回転見せし金魚の命かな 東京 荒井桂子
 夏の川足を投げ出す沈下橋 同
 気の毒なほど叫ばるる毛虫かな 同
 満池谷墓園塙の蟬しぐれ 西宮 本郷桂子
 露涼し祈りて吾を鎮めをり 同
 万緑の六甲山に語ること 同

雲刷きて鵜舟離せり金華山 東京 阪西敦子
 漕ぐ櫂にとんと酒揺れ鵜舟発つ 同
 火と水と闇押し合へる鵜飼かな 同
 踏切の分かつ人ごみ日の盛り 神戸 山田佳乃
 スコールの洗礼うけし旅靴 同
 森の底よりひたひたと岩清水 同
 背山より鵜飼のための闇迫る 同
 六人の鵜匠の捌く闇の修羅 同
 鵜篝の光の帯に夜は更けぬ 同
 胎内に心音抱き月涼し 同
 夏の月地球儀にある海いくつ 同
 いつまでも祇園囃子を見送りぬ 同
 追憶は師の白服のゆく三瓶 米子 中村囊介
 ゆるやかに葉表となる青芒 同
 黄菅野を覚ます狐の嫁入りは 同
 薫風や稲畑汀子句集成 長岡 安原 葉
 御遺影はみな微笑みて五月晴 同
 屋上に出よ六甲の風薫る 同
 父の日の娘に終活を命じらる 相模原 木村享史
 梅雨晴の朝日朝風朝の富士 同
 汀子恋ふ老の心の火蛾よりも 同
 黒々と遠流の島の泉かな 東京 田丸千種
 火の山のしじま深かり泉湧く 同
 源を見せず泉の透きとほり 同

雑詠句評（十一月号より）

青空はこんなに眩し梅雨晴間 東京 岩村恵子

梅雨晴・夏、六月の季題。

うつとうしい梅雨どき、その晴れ間を詠んで、何とも、明るく、うれしくなる句である。用いている言葉も、単純明快。云うこと無しである。（とは歩）

梅雨に入ると空はどんよりと曇る日が毎日続き、雨もしとしとと降り続き昼間でも薄暗い五月闇の日々がつづくのである。そんな中のある日、曇天は払われ、一面の青空が拡がって、曇天に馴れていた目には眩しい。明るい句である。（廣太郎）

空間も水面も占むる蛍かな 東京 伴 統子

「空間も」「水面も」と、読み手は放り出される心持ちだが、「占むる蛍」によって、闇を飛び交う蛍の光とそれを映す水面の光、一筋の線と点だけではない膨しい数の蛍の光の中へ着地させてくれる。虚実津然一体となった水辺の蛍の光の世界に圧倒される思いである。（眞理子）

最近ほ蛍を見る事の出来る水辺が結構増えてきたという話を聞

子の席にビールのグラス仲間入り 横浜 高浜礼子

成人を迎えたわが子が、はじめて家族と共にビールを飲むのである。セットで買ったビールグラスは夫婦と来客用に使われていたが、今宵は子の席に置かれ、母親が冷えたビールを注いだ。軽やかな乾杯の音のなかに、成長した子どもを頼もしく思う作者。ぎこちなくビールを口に運ぶ子どもの仕草も愛らしく想像できる作品である。季題を通して、家族の一つの節目をさりげなく描いている。（陶句郎）

何時迄も子供だと思っていた我が子が何時の間にか成長して成人になった。そして夏が来てその食卓にはビールのグラスが用意されて、初めて酒の味を覚えたのだろう。嬉しさと、ちょっと母親の複雑な、心境も見えて取れる。（廣太郎）

いたりもするが、蛍の群生しているのは幻想的でもある。宙という空間や水面を所狭しと光の帯を曳きながら飛んでいる蛍の美しさが描かれている。(廣太郎)

夕菅に山気流れて黄昏る

京都

山崎貴子

一読して夕菅の黄と暮れてゆく空の色が響き合って美しい。歳時記の例句にもそんな黄昏時の夕菅が多く詠まれているが掲句は、そこに山気の流れを表現することで色合いだけでなく、夕菅の花の質感や野原全体のひんやりとした空気も清々しく感じさせる。(肖子)

筆者は三瓶山の夕菅を想像するが、全国にはこの花が見られる場所は多いだろう。夕方から咲き始めて夜を彩る姿は見る人の心を和ませるのである。咲き始めの黄昏時の微妙な空気を読み取って、季題の姿を見事に捉えている。(廣太郎)

そこひ癒え風呂場の黴のくつきりと

大阪

酒井湧水

「黴」(かび) 梅雨期の湿度と温度により発生する茸を生じない

菌類である。主として糸状菌を言う。有害なものに黒黴、青黴がある。中には麹黴など有用なものもある。

掲句は、「そこひ癒え」と言っている。患っていた病が癒えた目に今まで見えていなかった物が見えだしたのである。よく見えだしたのは嬉しい反面、見えなくてもよいもの、見たくないものまで見えだしたのである。作者は「黴」と言っているが、「黴」以外にも見えだしたものがあるのではないかと想像する。

筆者は、白内障の手術をした友人から自分の黴までよく見える様になったと嘆く言葉を聞いたことがある。(青天子)

目の病気は厄介なものであ負が、現代の医学の発達から、結構克服出来るものも多いと聞く。筆者も色々な目の病気を経験したが、それが癒えて見えるようになった感激は一人である。そんな作者の実感が見て取れる。(廣太郎)